東北大学ＳＦ研究会　特別部会
「東北大ＳＦ研、大いに中国ＳＦを語る」　配布資料

下村思游 *

2019/10/12

1　【重要】本企画の注意事項

録音・実況など、講演内容を拡散する行為はすべて禁止。個人的なメモのみ可（メモ内容のブログ等での拡散は禁止）。本配布資料の無断複製・二次配布禁止。

ＳＦファンとして、情報を広く共有したいという気持ちは痛いほど分かるのですが、どうか本企画に関してはご勘弁を。お互いに楽しい場となりますよう、ご協力お願いします。

また、質問等も随時受け付けるものの、回答出来ない・しない場合もあるので予めご了承ください。

2　中国ＳＦとは？

一言でいうと、フロンティア。

なにがあるのかまったく分からない。なにが中国で読まれているのかまったく分からない。だからこそ、どんな作品と出会うのか分からなくてものすごく面白い。

3　中国ＳＦ・中華ＳＦ・華文ＳＦの定義

中国ＳＦとは、中国本土の作家のＳＦとして定義される。今話題の劉慈欣、カク*1景芳の作品は中国ＳＦに分類される。

中華ＳＦは、中国本土＋香港・台湾などの地域＋諸外国の中華系移民など、中国にルーツをもつ作家のＳＦと定義される。中国系アメリカ人であるケン・リュウ、テッド・チャン、アリッサ・ウォン*2、台湾系アメリカ人であるジョン・チュー*3などの作品は中華ＳＦに分類される。

華文ＳＦは、中国本土＋台湾・香港の作家の作品など、中国語で書かれたＳＦと定義される。基本的には、中国ＳＦの定義に、台湾や香港などの地域を足したもの。

---

* 東北大学ＳＦ・推理小説研究会、東北大学理学部物理学科

*1 赤へんにオオザト

*2 中国とフィリピンにルーツをもつので、一概に中華ＳＦと断じるには難もある。ネビュラ賞、ヒューゴー賞、ローカス賞、世界幻想文学大賞などを受賞。

*3 「The Water That Falls on You from Nowhere」で 2014 年のヒューゴー賞短編小説部門受賞。

4　科幻四天王

中国のＳＦ作家（科幻作家）は、もはや追い切れる数ではなく、ひとりひとり話していたらきりがない。ここでは、もっとも有名な四人の作家に絞って紹介する。

4.1　劉慈欣

1963 年生。もともとは中国の奥地にある国営火力発電所のエンジニアだった。各種設備をモニターしつつ、職場のパソコンで作品を執筆していたという逸話があるが、真偽のほどは定かでない。そして「三体」発表前後に離職。しばらく無職であったため、金銭的に困難な時期があった。

代表作に「三体」シリーズ、「さまよえる地球」「円」など。邦訳作品に「神様の介護係」[*4]。長編短編すべて合わせても 30 作程度に過ぎず、作品数自体はそこまで多くはない。最近は講演を積極的に行っており、あまり執筆活動はしていないらしい。

民族意識にとらわれやすい中国本土の作家にあって、劉慈欣はその視野の広さが特徴的。「三体」はもちろん、「円」や「さまよえる地球」と、邦訳作品のすべてでその視座の高さ（全人類的な視点）を感じることが出来るだろう。また、中国人好みの“硬科幻”（ハードＳＦ）を得意とし、中国本土では絶大な人気を誇る。一方で、エンジニアだったためか、科学者や科学に対して謎の理想像をもっていて、中国では過剰な描写ではないかとの指摘もある[*5]。

“科幻四天王”として紹介したが、実際には、『科幻世界』が劉慈欣とほかの 3 人を一緒に売り込むための宣伝文句が定着したと見るのが正しいか。人気という面でみれば、劉慈欣が明らかに飛びぬけて人気で、次いでカルト的人気を誇る韓松、そしてほかのふたりという感じ。

4.2　王晋康

1948 年生。執筆活動に入るまでの生活については不明な点が多い。

代表作に「水星播種」など。邦訳作品に「プロメテウスの火」、「養蜂家」、「天図」、「生命の歌」。

四天王の中で突出した年長者であり、商業デビュー自体は遅いものの、作家としての世代でも明らかに数世代上の大ベテラン。生命に関する著作が多いのが特徴で、比較的年齢が上の層のファンが多い。小説の語りは、ベテランだけあって四天王の中で一番上手い。作品の出来には波があるものの、全体として読みづらい印象はない。中国本土のＳＦファンは、90 年代の作品を評価する一方、00 年代以降の作品に対してはそこまで評価していない。これは、王晋康があまりにも生命のことばかり扱うので、若いファンからは飽きられているといったことが原因か。加えて、文中での女性に関する描写や人物造形が前時代的であり、そのことも若い世代からは評価されていない原因になっている。

4.3　何夕

1971 年生。執筆活動に入るまでの生活については不明な点が多い。

[*4] 日本ではあまり知られていないが、本作には「人間の介護係 (仮題)」という続編が存在する。

[*5] 「三体」で言えば、豆腐メンタルすぎる理論物理学者たちがこれにあたる。劉慈欣としては、科学者というものは、常に崇高な理想に燃えていて、理想が破れると精神も崩壊してしまうものらしい。同様の問題は、後述の王晋康にも見られる。

代表作に「傷心者」など。邦訳作品に「雨ちゃん」、「たゆたう生」。

四天王の中では一番若く、ジュヴナイルっぽい作風が特徴。古典の要素を取り入れたり、主人公が何夕自身であったりと、非常に特異的な文体の小説を書く。センチメンタルで抒情的な、時空を自由に操る大スケールな物語が評価されるものの、その自意識過剰気味な文体を嫌う声も根強い。

何夕や宝樹など、中国の若手作家は時間ＳＦを得意とする傾向が強く、また作品も多く出版されているのでその人気がうかがえる。日本でも時間ＳＦは根強い人気をもつが、やはり共通する何かがあるのだろうか。

4.4　韓松

1965 年生。新華通訊社（新華社通信）の記者・編集者として勤務するかたわら、創作を続けている。要は中国共産党直属のジャーナリストなのだが、その取材経験を活かした風刺や政治批判を得意とする。

代表作に「紅色海洋」、「地鉄」、「美人狩 (ケモノへんに昔) 指南」など。邦訳作品に「セキュリティ・チェック」、「再生レンガ」、「水棲人」。

全体的に独特の読みづらさをもつ中国ＳＦ界の中でも、ひときわ読みづらく、読みづらいがゆえに高い中毒性をもつ作家。読みづらさの原因としては、中国国内の政治的な問題がテーマとなっていることや、晦渋極まる文体、難解な表現などが挙げられる。また、中国のＳＦは、難解で重苦しい主題を扱いたがる傾向[*6]にあり、韓松の作品はその最たる例と言える。

中国のポストモダン文学といえば、まず莫言、二三歩下がって韓松といった感じで、中国のポストモダン文学を代表する存在としても純文学界隈からも知られている[*7]。

5　韓松「暗室」について

現在、本企画の登壇者ふたりで韓松の短篇「暗室」の翻訳をすすめている。

本作は、2009 年の第 1 回星空賞[*8]短編小説賞を受賞した作品で、韓松の作品の中でも過激な内容で知られ、韓松の特徴がよく出ており、また中国国内の政治的状況に詳しくなくても読むことが出来る作品でもある。

5.1　あらすじ

語り手である「ぼく」は、かつて発生したある出来事の調査を行うために、ピンカス谷を訪れた。そこには、赤子どころか、胎児の骨と思われるおびただしい数の人骨が山積していた。「ぼく」は痛ましい出来事に胸を痛めつつ、当時を知るアルファ氏という老人の元に向かった。

アルファ氏は、「ぼく」にアルファ氏自身が胎児であった頃の記憶を語る。胎児たちは、相互通信可能な電磁的なネットワークをもっており、大人たちの社会からは独立した、高度な社会を構築していたのだ。そしてついに大人たちの社会が胎児たちの社会が存在することを認識し、人類は史上はじめて他の文明世界との接触を果たすのだった……。

---

*6 これには、中国においてＳＦが子供の読み物扱いされてきたことに原因があると考えている。これを払拭したのが劉慈欣の「三体」であり、韓松の作品群であった。

*7 かつては並置されたこともあったのだが、莫言がノーベル文学賞を受賞したので同格ではなくなった。

*8 中国のＳＦ文学賞のひとつ。「暗室」と同年の翻訳小説賞では、チャン「息吹」、スティーヴンスン「スノウ・クラッシュ」、ル＝グィン「闇の左手」などオールタイムベスト級の作品を抑え、圧倒的な得票差で筒井康隆「時をかける少女」が受賞した。

5.2　訳者コメント

この作品で展開される社会や文明の描写は、総じて陰惨で混沌としたものであり、読んでいて血沸き肉躍るというような類の作品では決してない。しかし、この作品で描かれた社会を読んだとき、急速な発展を遂げた中国社会を想起せずにはいられないのも確かなことだ。

基本的に、中国色が強すぎるあまり外国人には理解出来ないことが多い韓松の作品にあって、本作は中国社会に対する強烈な批判精神が、かえって外国人である私にさえも作中の悲惨な描写に嫌悪感を覚えさせるほどに作用している。

本作は、一般にＳＦとしてだけの価値で測ればそこまで重要な作品ではない。しかし、韓松の豊富な批評精神、社会に対する強烈な問題意識、それを実現するための陰惨な文章表現、そしてそれらをＳＦに織り込んで語る手法などにおいて、韓松の創作の姿勢を体現した非常に重要な作品のひとつである。現状、韓松の邦訳作品が 3 作と少なく、またどれも比較的理解しやすい作品であり、本質的な“理解しにくさ”からは離れた作品であるため、本作は韓松の本質的な特徴を日本に紹介するにあたっては非常に重要な位置を占めると考える。

5.3　版権取得までの経緯

一応参考程度に、私がどのようにして韓松の「暗室」の版権を取得したかについて記す。

前回の潘海天「偃師伝説」の際は、同作を掲載し、現在も版権を持っている『科幻世界』編集長の姚海軍に直接電話をかけ、同人翻訳に限って翻訳権を取得した。

今回の韓松「暗室」は、『科幻世界』ではなく、ウェブ雑誌の『新幻界』に掲載された作品であり、前回と同じ手段では連絡が取れなかった。しかし、私個人が twitter で『新幻界』公式アカウントにフォローされていたので、中国語で DM を送り、韓松への連絡を仲介していただいた。結果、韓松から直接、同人翻訳に限って翻訳権を認めていただき、今回の訳載につながった。

中国本土では、電子メールよりもチャットツールでのやりとりがはるかに盛んであり、また中国のグレート・ファイア・ウォールによって Gmail などの主要な電子メールがほぼシャットアウトされてしまうので、インターネット全盛の今日にあって、中国本土の人間と連絡を取るのはなかなかに難しい。しかしながら、中国語が出来るならば、直接電話をかけたり[*9]SNS で DM を送ったりすれば、メールを送るよりもはるかに簡単にコンタクトが取れる。基本的に、中国のＳＦの人たちは、同人翻訳に関して非常に好意的に接してくれるので、きちんと連絡して、非商業的であることを伝えれば問題ないと思う。

6　中国のネット小説

基本的に、日本と同じく、有象無象の「なろう小説」的な質の低い、自己満足的な作品が多い印象。光る作品もあるようではあるのだが、あまりにも作品数が膨大なので、私一人ではとても把握しきれない。

紙面に発表される同時代の中国ＳＦも追い切れていないのが実情なので、出来る人がいるならその人にネット小説方面はお任せしたい、というのが本当のところである。

[*9] 中国と日本とでは、基本的に一時間の時差が存在するので、そこだけは注意すること。

7　中国ＳＦ界の問題点

中国において、真にＳＦの歴史がはじまったといえるのは、80 年代後半から 90 年代初頭にかけてのころ。「三体」の大ヒットがあったとはいえ、まだまだ歴史は浅く、様々な難題をその身の内に抱えている。ここでは、それらの問題を見ていく。

7.1　編集者の不足

80 年代後半から本格的に活動がはじまった中国ＳＦ界隈では、まだ作品の質を見極めることの出来る有能な編集者の数が足りていないように思う。

なぜいまそれを訳すのか分からないといった感じの作品群[*10]が多数翻訳されていたり、訳されてしかるべき超有名作家の作品[*11]が訳されていなかったりと、特に海外作品に関して、質を見極められるような眼をもった編集が少ないのではないかと考えられる。

中国ＳＦには、生命や自意識、自由意思に関する重厚なテーマをもつ作品が多くみられるが、それらのテーマを考えるならば、イーガンは読んでおいた方がいいのではないかと思う。しかし、イーガンが中国で翻訳されていない以上、それもなかなか難しい状況にある。

7.2　翻訳者の不足

編集者と並んで、有能な翻訳者の不足も指摘される。

小松左京の作品は「日本沈没」「果しなき流れの果に」などが翻訳されているが、一部の作品については訳が悪くて読みづらいとの指摘がウェブ上に多数存在する。

まだ本格的に国外ＳＦの翻訳紹介がはじまって 30 年も経っていないので根本的な人材不足も考えられるが、小松左京ほどの作家の作品が翻訳の問題にさらされているのはなかなか心苦しい。

7.3　批評家の不足

『科幻世界』やその他の中国のＳＦ雑誌を読んでいて気付くのは、批評を掲載していることがほとんどない、ということである。一応、中国で公開を控えていたり、当時人気であった映画の解説や、有名作家による書評、あるいは特集解説という形で紹介文が掲載されることはあるものの、体系的な批評が確立されていないように感じられる。

編集者、翻訳者、批評家の不足と、日本におけるＳＦ黎明期と比較すると、書き手はいても、という状況がうかがえる。現在の中国のＳＦファンには若い世代のファンが多いので、それらのファンが成長し、活動をはじめるようになっていけば自然と解決されていくのかもしれない。

話はそれるが、以前『科幻世界』編集部とコンタクトをとった際に、円城塔と伊藤計劃について解説を書けるのだがどうか[*12]、と自分を売り込んでみたら、とりあえずその文章を書いて送ってほしいと興味を示して

[*10] ソ連ＳＦ、クレス、シルヴァーバーグ、ベイリー

[*11] イーガン、ティプトリー、エリスン、ル＝グィン、バラード、オールディス、ディレイニー

[*12] 伊藤計劃は中国ではあまり人気ではない。ＳＦ小説としてではなく、ただの軍事小説としか認知されていないようだ。円城塔については、ほとんど紹介されていないままになっている。これらに関して、きちんと解説した文章を書きたい。

いた様子だった（『科幻世界』に掲載が決まれば原稿料をもらえるのだが、没になったら完全に努力が水の泡なのでなかなか筆が進まず、原稿を渡すのはのびのびになっている）。今後、中国に日本のＳＦを売り込むなら、日本における評価や、作品の解説とセットにする、ということも行っていくべきだろう。

7.4　ＳＦ市場の小ささ

実際のところ、中国のＳＦ作家の大部分は金銭的な問題に直面している。中国本土のＳＦ作家のほとんどが兼業作家であり、創作に専念出来るような環境にある作家はごくわずかに過ぎない。「三体」シリーズを 2000 万部も売った劉慈欣ですら、「三体」シリーズ以外の作品の売り上げはブームの前後でさほど変わっていないのだという。

『科幻世界』は新規ファンの獲得や将来のＳＦを担う人材育成を目標として、主に学生世代に向けてマーケティングを行っているのだが、まだ未来への投資という感じで直近の利益にはつながっていない。『科幻世界』がいくら売れたところで、一冊の価格はわずか 8 元。日本円にして 130 円程度でしかない。

この状況が変わるきっかけになったのが、今年の劉慈欣の短篇「さまよえる地球」を原作とした映画『流転の地球』の大ヒットである。国内外の企業が、ＳＦは売れる、ということに気付き、中国のＳＦ小説の映画化権をおさえにかかり、将来のドル箱の囲い込みをはじめた。中国の巨大 IT 企業テンセント[*13]は、中国国内で新たにＳＦ文学賞を設け、将来の映画化を見込んで原作の確保と才能の発掘に乗り出している。

今後もこの状況が続き、商業的な成功を収めていけば、作家が執筆に専念出来るような環境が整えられていくことだろう。

8　総括

中国ＳＦは、本格的に歴史がはじまってまだ 30 年にも満たない。個人的な印象では、現在の中国ＳＦは、日本における 60 年代〜70 年代初頭くらいの作品と同程度の完成度と感じる。

中国ＳＦの問題は、中国国内の事情によるものと、歴史の浅さとのふたつに起因する。2019 年現在において、中国ＳＦがアメリカや日本のＳＦよりもいいものであるとは感じられない。しかしながら、人材が充実した 10 年後にどうなっているかは、向上しているにせよ失速しているにせよまったく分からない。

私に出来るのは、同時代の中国ＳＦに対して、同時代の人間として出来るだけ客観的な評価を下し、それを将来に伝えるとともに、商業翻訳されなさそうな中国色の濃い作品を着実に翻訳紹介していくことであると考えている。将来的には、先の『科幻世界』への寄稿の件のように、日本から中国に向けて、なんらかの形で中国ＳＦの発展に貢献出来るような活動も出来れば、と思っている。

中国ＳＦを読んでいて、または翻訳していて一番楽しいのは、作品の細部から、もしくは根底から、香り立つ中国らしさが読み取れることである。中国以外の作品でかつて出会ったＳＦ的アイデアが、別の装いをもって目の前に現れるのがとても面白い。たとえ中国文化を露骨に下敷きにしなくても、チャイナドレスの美女が出てこなくても、中国ＳＦには、自然と中国らしさが立ち上がってくる。中国から離れようとして書かれた小説であっても、文体が、発想が、展開が、自然と中国らしさを体現している。作品を読みながらそれを見出すのが、とても面白かった。

結局のところ、私は中国ＳＦが好きなのかもしれない。

[*13] 映画から漫画、アニメ、ゲーム、電子決済など、広範な企業範囲をもつ総合 IT 企業。ゲーム業界では世界最大の売り上げを誇る。日本ではなじみが薄いかもしれないが、時価総額では GAFA に並ぶほどの超巨大企業である。

9　中国ＳＦ・中華ＳＦを知るために

残念ながら、中華圏以外の中華ＳＦに関するまとまった日本語の資料が存在せず、また中国のＳＦ作家たちに関する情報にはかなり不明瞭なものが多いので、資料の充実に期待したい。（私がやるべきなのだろうか？）

9.1　『中国科学幻想文学館』武田雅哉・林久之、大修館書店、2001

2001 年刊行と、少し時間は経ってしまっているものの、20 世紀末までの中国ＳＦを知るには最良の一冊。中国ＳＦに興味があり、まだ読んでいないならば基礎文献として購入することを薦めたい。

9.2　雑誌『東方』451～453 号、東方書店

立原透耶先生の連載「中華圏ＳＦほんのさわり」が掲載されている。本記事では最近の若手ＳＦ作家についても触れられているので、『中国科学幻想文学館』とあわせて中国ＳＦの概要を掴むことが出来る。

9.3　研究ノート『中国科幻小説の諸相』

ウェブ上で無料公開されている、立原先生の研究ノート。北星学園大の学術情報リポジトリからアクセス可能。

9.4　「卜部理玲のＳＦブックガイド」より「メモ：現在手に入る中国ＳＦリスト」

東北大ＳＦ・推理研バーチャル会員の卜部理玲がまとめた中華ＳＦの翻訳を（なるべく）網羅したリスト。「卜部理玲のＳＦブックガイド」で検索。随時更新中。

`https://scrapbox.io/ryray-sf-bookguide/`